

---

# 僕の想愛(きもち)は浮遊中。

天矢 綱

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕の想愛<sup>いふき</sup>は浮遊中。

### 【Nコード】

N1365BA

### 【作者名】

天矢 綱

### 【あらすじ】

隼人が莉奈に告白しようとしたら、莉奈の彼氏（？）が登場！？でも、その男のホントの正体は…？

伝えても伝わらないってどうしたらいいの？

僕の運は限りなく零（ゼロ）に近い。（前書き）

これはもう何がなんだかわかりません（笑）  
とりあえず読んで下さい！

僕の運は限りなく零（ゼロ）に近い。

それは今思えば、運命を告げる鐘だったのかもしれない……。

人は大抵、“運命”という言葉を聞くと、いい方向の“運命”を想像する人が多いだろう。

でも僕におこつたその出来事は運命は運命でも、悪い運命なのだから。

|   |   |   |
|---|---|---|
| + | + | + |
| * | * | * |
| + | + | + |
| * | * | * |
| + | + | + |
| * | * | * |
| + | + | + |
| * | * | * |
| + | + | + |
| * | * | * |
| + | + | + |
| * | * | * |
| + | + | + |
| * | + | * |
| + | + | * |
|   | * | + |
|   | + | * |
|   | + | + |
|   | * | * |
|   | + | + |
|   | * | + |
|   | + | * |
|   | + | + |
|   | * | * |
|   | + | + |
|   | * | * |

放課後、誰もいなくなった教室に僕、柊隼人と僕が想いを寄せている人、水連寺莉奈が互いに向かい合っている。

このときに教室なんかに入ったら、告白現場に居合わせてしまったとても間の悪い奴と思う。

なぜ僕がこんなことを言い出したかという、まさに今僕が言った通りのことがおこったからだ。

僕が念願の想いを打ち明けようとしていた……そしてそいつはその鐘がなった瞬間勢いよく教室のドアを開けた。

「.:つ!？」

そいつは、テスト当日遅刻してきて、一斉に生徒が自分をみて驚いている……そんな顔をしている。

「どうということ?」

いや、わかるだろ。そう心の中でツツコんだ。

というか分からないということは、こいつはバカなのか…?

その前にこいつ誰だよ! 人が告白しようって時にいきなり教室に入ってきて…。普通なら立ち去るよな? 僕なら無言で立ち去る。できなかったら1億円やろう。

「昂ちゃん!? ち、違うの!」

必死にこの出来事を何もなかったかのようにいう水連寺さん。でもまだ何もおこってないんだけどね。

普段、おだやかで分け隔てなく接していてクラスでも好かれていた優しい。なのに、こんなふうに慌てる水連寺さんは初めてだ。って待て待て待て待て! 昂ちゃんって誰だ? あだ名!?

男子の名字を“くん付け”でしか呼ばない水連寺さんがこの男をあだ名!?! え?! え?!? どういうこと!?!?

「この前、俺に好きだって言ったくせに…。あれはやっぱり嘘だったのか?」

何い!?

「違うって! 今、私はこの人に呼び出されただけで、それで丁度私が来たときに、昂ちゃんも来ただけ。誤解しないでっ!」

莉奈が人に告るなんて…。この2人って付き合ってるのか? え? これ僕の今の立場って完璧悪者じゃん!

「おい、お前！ 莉奈に何の用があったんだよ！！」

「いや僕は…」

ハッキリ言うべきなのか…？ いや、明らかにこの2人両想い…やはりここは…

「僕はただ…こ、この手紙を届けてもらうように渡しておいてくれ。と頼まれただけで…その人は僕も誰かは分かりません。でも制服は風中<sup>ウチ</sup>じゃなかったですね。」

僕は咄嗟に嘘をつき、

「手紙だとお！？どこの誰だよ！そいつ許さねえ！！」

「それで手紙がこれです。」

手紙を渡した。

「名前がねえな…くそっ」

名前書いてなくてよかったあー！！

「まあいい、莉奈帰るぞ。」

「えっ！私…あ、ちょっと腕引っ張らないでよ！」

昂ちゃんと呼ばれた男は、莉奈とともに教室から出て行った。

1人取り残された僕は、びりびりになった手紙の破片を集めて、鞆に入れた。…ってこれなんだ？なんなんだ？え？

[illegible]

「ちよつと昂ちゃん！歩くの早くない？」

「お前が遅いんだよ！それより莉奈ーあの男とはなんにもないんだな？」

「ないっていつてるじゃん! まったく…っていうか昂ちゃん! 私のことは“お姉ちゃん”と言いなさい! まるでどっちが上かわからないでしょ!」

「お姉ちゃん」だとー！そんなこと言うんだったら「弟様」と呼べよ！」

「!!! もー知らないっ」

「ったく昂ちゃんは……。柊君、怒ってるだらうなあ……。はあ……。」

「ん？　なんか言ったか？」

「別になんでもないよ。」

明日、柊君に謝ろう。そして、ちゃんと説明しておこう。別にな

んにも心配することはない。そう思っていた。

“心配することはない” そう思っていたのに…

まさかあんなことになるとは今の私にはわからなかった。



**僕の運は限りなく零（ゼロ）に近い。（後書き）**

ジャンルは恋愛とありますが、恋愛が含まれるものと考えて下さい  
（笑）

作者もなんかちょっとノリで書いています。

更新は：1週間とか10日とか：

1か月になるかもしれないかも↑

**僕の睡眠（しあわせ）は邪魔されるのが当たり前。（前書き）**

がんばりました…読んでくれると嬉しいです…

**僕の睡眠（しあわせ）は邪魔されるのが当たり前。**

僕はなぜか朝早く目覚めたため、普段遅刻ギリギリの僕は、15分前に教室の席についた。

「よっ隼人！」

相変わらずこのハイテンションをどーにかしてもらいたいものだ。

「うるせーこのハイテンション野郎！」

なんとなく悪態をついてみた。

「なんだよーつれねーなあ。ハイテンション野郎じゃなくて俺にはちゃんとした高田純也たかだじゅんやっつー名前があんだよ」

「はいはい」

適当に相槌を打っておいた。

僕にはこんなどーでもいい会話よりも、昨日のあの2人のことが気になる。結局告白にも失敗したしな……。

「おい隼人ー！あの2人ってなんだよ？昨日一緒帰れないっていったのは、告白しに行ったからだったのか？」

「そーそー…って、え！なに人の心ん中呼んでんだよ！エスパーか  
！！」



「え？なんで？」

「ばれたら騒ぎになるし、莉奈ちゃんにも被害が大きい。それにまだ確定してわけじゃねーだろう？」

「なるほど…」

「じゃあ俺、席に戻るわ」

そういつて、純也は席に戻った。

純也話してよかった。そう僕は思った。

僕は少し“のび”をして、先生が来るまで眠りにつくことにした。

|   |   |   |
|---|---|---|
| + | + | + |
| * | * | * |
| + | + | + |
| * | * | * |
| + | + | + |
| * | * | * |
| + | + | + |
| * | * | * |
| + | + | + |
| * | * | * |
| + | + | + |
| * | * | * |
| + | + | + |
| * | * | * |
| + | * | + |
|   | + | + |
|   | * | * |
|   | + | + |
|   | * | * |
|   | + | + |
|   | * | * |
|   | + | + |
|   | * | * |
|   | + | + |
|   | * | * |

やっと、本格的に眠気が襲ってきた…。

寝れるぞ！  
そう思ったら、

「おら、お前ら席につけー！」

パンツと音をたてて、先生が教室のドアを開けて入ってきた。

僕は一瞬だけ殺意が芽生えてしまった。

僕は起きあがって、先生の話聞くことにした。すると、何かが僕の机から落ちた。



**僕の睡眠（しあわせ）は邪魔されるのが当たり前。（後書き）**

次の展開はいまだ悩み中…どーしましょう☆汗  
アドバイスいただけるとうれしいです…。

**僕は会話（しょくよく）が全然ない。（前書き）**

今回は会話なしです…。

ごゆるりと☆↑



**僕は会話（しょくよく）が全然ない。**

今日の授業は全く頭に入らなかった。

僕はずっとあの手紙のことについて考えていたからだ。

きっと水連寺さんと昂ちゃんという男は付き合っていて、それが僕にバレてしまったため、僕の弱みを握って付き合っていることをバラさせないようにする。もしバラしたら…恐らく僕はその時点でこの世にはいないのだろう。

昨日のことで、水連寺さんの印象がガラリと変わってしまった気がする。

いや、気がする…というか変わったと僕が勝手に思い込んでるだけかもしれない。

でもあんな不良みたいな男に水連寺さんが告白するなんて…やっぱ表では皆に笑顔をふりまいていて、裏では水連寺さん自体があんな感じなのかもしれないと思う。

（キーンコーンカーンコーン    コーンカーンキーンコーン）

チャイムが鳴ってから、僕は水連寺さんの席の方を見た。

僕の席は左から2列目の前から3番目。日当たりとかがもの凄く丁度いい。

中2になってからずっと窓側だから快適すぎて困る。

水連寺さんの席は左から3列目の前から1番目。教卓の一番前だ。

あの席はみんな嫌がっているけど、水連寺さんにとってはなんともないようだ。

さすが成績優秀。

つとあれ？水連寺さんがいない…？  
まさかもう行ったのか？

…なんていう風になる前に席の方を見たのだ。  
すると、水連寺さんも同じようにこちらを見ていた。

息ぴったり！そう思った。

一昨日までの水連寺さんとこんな風に目があつたなら、ジャンプするなり、ガッツポーズするなりと喜びを身体全身を使って表現していただろうが、今は、…無言。というか、相手の出方を待っている。

クラスのみんなは、授業が終わると同時に、ダッシュで購買にある数少ないパンを買いに行っているため、クラスには十数人前後とあったところだ。

水連寺さんは辺りを見回して、僕の方を見て頷いた。

いや、この場合頷くのは僕の方だと思うんだけどなあ…と思って  
いるうちに、水連寺さんは教室から姿を消していた。

慌てて僕も席を立て追いかけた。

**僕は会話（しょくよく）が全然ない。（後書き）**

ST「はがない」ですね（笑）

なんか内容が混乱してきた…くあー…

ご意見お待ちしております。

**僕の体力（ちゃんす）はL.V. 4並に等しい。（前書き）**

なんとか4話…。

楽しんで読んで下さいなっ☆

**僕の体力（ちゃんす）はLv. 4並に等しい。**

一言言うと、この学校は広い。

今、僕は水連寺さんに“お弁当の時間に中二階に来てくれ”と言われ、先に行った水連寺さんを追いかけるようなカタチで中二階に向かっている。

購買と中二階は真逆方向だから人は全くいないだろう。

風中こと、風浜中学校の体育館は広いがバスケット部やバレー部を主に使わせるため、中二階を設置し、そこでバトミントン部などが活動できるようにした。

“中二階”と言われて、ピンとこない人は、“ホール”みたいなところだ。一応、この学校にもホールはありますが。

昼食の時間帯に呼ばれてしまったため、腹が減って仕方がないが、走っていることで空腹を忘れてしまう。

それよりも、走っているというのに、一向に水連寺さんに追いつかない…。角を曲がるときに水連寺さんの後ろ姿が見えた。

やっとみつけた！

そのまま走り続け、中二階の階段の前まで来ることができた。すでに僕は息があがっている…無理もないと自分でも思う。

僕たち2年生の教室は5階にあり、天井と床の長さがハンパなく長いので、つまり階段も長い。だから息があがってしまうのだ。

一度深呼吸してから、ゆっくりと足を進める。

最後の階段を上り切って、辺りを見回す…。左には体育館、右には窓。前奥にはドアがあるだけでいつもと変わらない風景だ。

「あれ…?」

水連寺さんがいない。

ここに行ったのは見た…。じゃあ、行けるところは1つ…。僕は前奥のドアを目指して、歩き、ドアノブを回した。そこに、真剣な眼差しの水連寺さんが立っていた。

「水連寺さん…話って一体…」

「昨日のこと…。」

「え? 昨日ってああ…」

「弟<sup>あれ</sup>がいるっていうこと…言わないでほしいの」

“あれ”…って。ああ、彼氏<sup>あれ</sup>ってことか…。

「うん、わかった。人にバレると面倒ってことか。」

「え? う、うん。面倒っていうか、家の家訓というか…まあとにかく、だから弟<sup>あれ</sup>がいるってバレちゃダメなんだよね…。家<sup>うち</sup>って変わってるでしょ…。」

こんな真面目な水連寺さんに、不良の彼氏がいるなんてバレたら大変だもんね。なるほど。

「そんなことないよ。普通（の対応）じゃない？」

「…ありがとう」

「え？」

「そんなこと言われたのはじめてだから…。だから、ありがとう。」

水連寺さんに「ありがとう」何て言われたのはじめて…。しかもこの笑顔…チョー可愛い…!!

「ぼ、僕…す、水連寺さんのこと…!」

（キーンコーンカーンコーン　コーンカーンキーンコーン）

「え？　なんか言った？　チャイム鳴っちゃったから急いでゴハン食べないとね！　じゃあね！」

「あっ…」

ドアを開けて走って行ってしまった…

やっぱり“悪運命の鐘”だよ…はあ…。

でも、2人は付き合ってるから失敗してよかったのかも…。でも、自分の気持ち伝えたかった…。でも、2人は…でも…でも…はあ…。





**僕の体力（ちゃんす）はLv. 4並に等しい。（後書き）**

なんか隼人がチキンすぎるし、残念でならない…。

でも次からコメディっぽくなるかも。

というか…なってる。的な!?

なんか隼人が一人で盛り上がってます。次の5話結構好きかも。

次は（も）読んだほーが得だぜ↑え

僕（さくしや）は今更だけど「章」とか「話」とかどうしようとか思ってるけど

笑……？

僕（さくしゃ）は今更だけど「章」とか「話」とかどうしようとか思ってるけど

「はあ――……。――」

僕は帰路中にあるいつもの公園で大きくため息をついた。

「どしたあー隼人おー」

「えー？ まーいろいろとー…ッ！…なんでもない」

…っつかこいつに水連寺さんから忠告される前に話しちゃったんだが、これはどーしたらいいんだ？

まあこいつ忘れっぽいから、この話をしなきゃ大丈夫だろ。

てか、僕ホントついてない…。

なにこれもう…。

「じゃーそろそろ帰るかー」

「そうだねー」

この公園から自宅には5分、いや3分もかからないから、もーちよつといってもよかったかな？

純也、家遠いから仕方ないかー…家もーちよいかかるっぽいし。

家では、ご飯食べて勉強して風呂入ってすぐ寝た。

が、次の日はギリギリの朝7時55分に起きた。8時30分まで登校で、学校までの道のりは20分。

制服に着替え、なんとなくTVをつけると、ビレテビレTVの占  
てーびー  
いがやっていた。

•  
•  
•  
○

「今日の最下位はごめんなさい（へ、△、＊）おとめ座のあなたっ？」

うるせーなこいつ…。

「ホントマジでくそツイてないかも♪ もーとにかくヤバイ（＊´・ω`）b ネッ 死の危険性大だよ〜ん☆★」

「え!?! 死?! 死!?!? 僕死ぬの!?!? ちょ、今日だけは登校拒否したいんだけど! 僕と同じ意見の人いるよね!?! ビレテレビTVみてえ!?!? てかビレテレビTV怖ええええええええええ!?!?!」

「そんなあなたのラッキーカラーは~~~~~! A<sup>あ</sup>K<sup>か</sup>A♪」

腹立つな〜この人! って…赤とか不吉! よりによって血の色かよ!?!

「そんなあなたのラッキーカラーは~~~~~! A<sup>え</sup>・K<sup>け</sup>・A<sup>え</sup>♪」

「2回も言うな——! 読み方変えただけで変わってねーじゃねーか!?! ラッキーポイント言えよお!?!?! ラッキーポイント!」

「そんなあなたのラッキ————」

「さっきから思ってたけど、“そんなあなたの”使い過ぎだろ!!! あと“ラッキー”伸ばしすぎだろ!!」

「————ポツインツトツ?は~~~~~頭蓋骨の鼻のかけらっ! 今日もし日頑張っていきましょう!! それじゃあまた明日~~~~☆」

「頭蓋骨の鼻（自分のとか）触るとかはまだいけるかもしれないじやん!？」 皮膚の上からチョンって。鼻のかけら!？ 無理に決まってるだろ——!! 今日も1日頑張れねーよ!!」

「ちよ、ビレテビレTVふざけんなよっ!!  
遅刻する!!」

僕は苛々しながらもパンをスープで流し込み、急いで家を出た。

[illegible]

道中、僕が不良に絡まれて口論になったり、財布を落したり、陣痛のきた妊婦さんをのせた救急車に衝突して大ケガをして入院したことは言うまでもない。

あ、あと、妊婦さんは無事、元気な男の子を出産できたそうだ。

僕（さくしや）は今更だけど「章」とか「話」とかどうしようとか思ってるけど

笑笑笑

僕の好きな人は十中八九（おそらく）、神出鬼没のようだ。（前書き）

なんかぐだぐだかもしれません。



僕の好きな人は十中八九（おそらく）、神出鬼没のようだ。

車に衝突して、入院するのはわかる。

けど、車に衝突して骨折だけって…え？

普段から運が悪いはずの…いや、運が悪い僕が、骨折だけ？  
運が零ぜろに近い僕が、骨折だけ！？

「ふぁー…」

なんか溜息が出るなあ…。

骨折だから入院する必要はないと自分では思うのだが、一応安静にして入院という風になった。

骨折だけで入院は聞いたことないような…あー、でもあったかもしれない…。

まーどうでもいいんだけどさっ。

僕の友達が確か、風邪ただけで入院したって言ってたな…。じゃあ骨折だけでも変じゃないよな？うん、変じゃない。

「入院してる日に限っていい天気だなー…」

「いい天気なのにそんな顔かよー！」

「！」

どうでもいい独り言を呟いたのに、それに返答するような“バカ

”は1人しかいない。ちなみに僕が“バカ”という扱いをする奴も1人。

それはもちろん、高田純也。

「なんだよー何の用だよ純也く！」

「せっかくお見舞いきてやったのにそれはないだろう！」

「いつ僕が来てくれって頼んだんだ？」

こいつに悪態つくのは、もうなれっこになってきたな。

「…せっかくおいしい話教えてやろーと思ったのになー！」

「おいしい話！？ 肉？それともケーキか！？」

育ち盛りの中学生の僕が肉が嫌いなはずがない。そして、ケーキも大好きだ。

「あんなあ、おいしい話〓食<sup>く</sup>い物<sup>もん</sup>の話とは限らねーだろうが。」

「…え？ い、いや間違えたわけじゃないから！ ボケただけだからな！？」

もちろん嘘。だっておいしい話って言われたら、“食べ物”を想像するよね？普通。

「素直になれよー、ったくー」

やっぱバレてる。別にいいけど。

「まずそれはいいから、おいしい話って何？」

学校でなんかあったのかも。100%そうだろう。そしてくだらないに決まっている。

「病院でさっき莉奈ちゃんと会ってさー…」

撤回する。そして土下座します。

「そして続きは？『それだけ。』とかはやめろよ？」

「…それだけ。」

「ふざけんなよ!!」

「嘘だよバーカ！」

僕のことを指差して大笑いしている。むかつくなあ…!

「指差すなバカ！」

腹を殴ってやった。

「いってー!!…そんでー、『あれ高田君、誰かのお見舞い?』って言われて、『隼人のお見舞い。今日学校休んだだろ?』って言った。」

「そんで？」

「『え？じゃあ私もお見舞い行こうかな？  
♪』って。以上。」

よろしく言つといてね

[illegible]

あ、今の声、ここ病院だから迷惑かも。

「あ、あとこれお見舞いの花だ。この花瓶に入れとくぞ?」

「待って。それ水入ってないから入れてきて」

「わかつた」

花瓶と持ってきた花を持って、この病室を出て行った。

ガラガラ：

「っ、はやつ……!!!」

…入ってきた人は花を持っていなかった…。

僕の好きな人は十中八九（おそらく）、神出鬼没のようだ。（後書き）

ぐだぐだでした。

すみません。

ちよつとやばいです。

明日更新不可です。十中八九。

僕は1話に出てきたのに7話になってようやく出てきた彼（ふりよう）が可哀相

題名長くてすみません。

僕は1話に出てきたのに7話になってようやく出てきた彼（ふりょう）が可哀相

「…って誰だよ!!!」

まだ…そんな風な状況の方がよかった。でも現実には甘くない。

あのヤンキー彼氏が僕の病室に入ってくるとは思いもしなかった。

彼女同伴で。

え？なにこれ？？なんだこれ？？？ 頭の整理？いや回転？どっちでもいいが、追いつかない。どういう状況だよ。説明求むぞ、オイ！

「柊君、ケガ大丈夫？ あ、骨折…だっけ？」

この気まずい（僕が思ってるだけかもしれないが）空気を一変させた彼女を尊敬すべき値に処すと僕は思う。

「うん、骨折だよ。骨折なのに入院なんて笑っちゃうよね」

「仕方ないよ、車に轢かれたんだよね。よりによって救急車っていう」

自分で言って自分で笑っている水連寺さんにつられて、僕も同じように笑った。自分のケガを笑うって…。

「元氣そうでよかった！ ね、昂ちゃん？」

まるで、今までの会話は手紙を書くときの軽い挨拶のだけだったような気分陥ってしまったんだが、それは僕だけ…？

「…」

見下すように（体制的にそうなるんだけど）、僕を見ていたが、目を合わせたら逸らされてしまった。まあ僕もその状況だったら逸らすけどさ。

「せめて、あの時の言葉遣いとかは謝って」

あの時————。ってあの時ね？

「…悪かった」

え！？ 意外と素直（不良なのに）！！

「あ、うん…いやはい、こちらこそ」

「お前敬語やめろ」

「こら昂ちゃん！！ ダメだよお前とかって言っちゃ！」

やっぱヤンキーだな…。

「あ、柊君これ。お見舞いの品です。粗末なのですが…」

水連寺さんが渡してきたのは、バスケットに入った、色とりどりの果物だった。



「え？　気なんて使わなくていいのに！　ありがとう！！」

僕の好きなリングも入ってる！　水連寺さんが剥いてくれたらうれたら、もっと嬉しいんだけどなあ…。

「…剥かせないぞ」

「え？」

「????　そろそろ邪魔だし、行く？」

コクリと昂ちゃん？が頷き、2人は僕の病室を後にした。

僕って心読まれやすいのかな…？　早く戻ってこいよ純也は何してんだよ…全く！　なんとなく憂鬱な気分だなーとかどうでもいいことしか考えることがないから、入院は嫌だったんだよ！！

————僕は隣の病室に、あの不良彼氏が入院していることを知ったのは、2日後である。

僕は1話に出てきたのに7話になってようやく出てきた彼（ふりょう）が可哀相

更新できてよかった…でもやばい…ああああああ

僕は語部（かんがえごと）が多いけど、何か？（前書き）

8話目…ですね。

僕は語部（かんがえごと）が多いけど、何か？。

入院生活3日目――。

普通、人は真上を見たときには、必ずと言っていいほど口が開く。仮に「閉じてますけど、何か？」なんていう奴がいたとしても、長時間、口を閉じっぱなしはキツイと思う。

なぜいきなり、こんな話かというと、今の僕は斜め45度上を向いて、口を開けて、ボーっとしているからだ。

病院で入院というものは、こんなにも暇なのか……という具合だ。まあ僕はたまたま例外で検査とかも特にあるわけではないからかもしれないが。

骨折で入院――。やっぱおかしいでしょ……！　　というか、いつまで入院なんだろう……。

これもすべて、ビレテビレTVの占いのせいだ……。ちなみに3日前（僕が入院した日）におとめ座のケガ人が何人も事故あったんだとか……。不吉すぎる。

入院中、朝のビレテビレTVの占いは必ず見て、実行している。ビレテビレの占いをしている人の名前まで覚えてしまった。プリンス早坂だ。これは推測だが、早坂先生は自惚れてるに違いないと思う。あくまで名前的にだが。

2日目には誰一人、お見舞いに来なかった……。別に来てほしいわけじゃないけど、1日目に3人も来たんだから、2日目にも誰か来るかなーなんて妄想するんじゃないかった。別に来てほしいわけじゃ

ないけどさ。

あ、もちろん、家族は来たけどね？ そりゃ当たり前でしょ。家族だもん。

ふと、入院初日に純也が持ってきてくれた花に目がいった。何の花なのかは、花にはあまり知識がないのでよく分らないが、若干萎れている…。

「…水換えてくるか。」

よっこいしょ。という擬音があってもいいくらいの起き上がり方…。骨折したのは左腕だから、水を換えるくらい全然大丈夫だ。

そういえば、純也が花をくれたあと、水連寺さんたちが来たけど、あのとき、ヤンキーくんの方が左腕全体を包帯で巻いていたけど、ケガでもしたんだろうか。まさか僕と同じ骨折だったりして…腕も同じ左腕だし。

僕は花瓶を持って病室を出た。

そして、すぐに思った。

水を換えてくるか。なんてこと思わなきゃよかった——と。

**僕は語部（かんがえごと）が多いけど、何か？。（後書き）**

2日間更新しなくてすみません。  
せっかく毎日更新してたのに…汗

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1365ba/>

---

僕の想愛(きもち)は浮遊中。

2012年1月12日19時47分発行